

ブラフマースートラのプラーナ説 チャラカ・サンヒターの風説との比較考察

長友泰潤

南九州大学 教養・教職センター 哲学研究室

On the theory of Prāṇa in Brahmasūtrabhāṣya

Taijun Nagatomo

キーワード：プラーナ、ヴァーユ、五風

On the theory of Prāṇa in Brahmasūtrabhāṣya

In the theory of the Brahmasūtrabhāṣya (Bbh), Śaṅkara's commentary on Brahmasūtra, vāyu (or Prāṇa) has two meanings, namely, the internal five winds and the god of wind. vāyu the internal five winds come into the Self and divide into five parts. Each of winds has a special quality. These parts are sometimes individually called Prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna depending on their organic function but sometimes 'Prāṇa' is used as a general term for all five parts. And these five Prāṇa aren't the function of the internal organs like manas and buddhi. When Prāṇa goes out of the Self, the body and all the sense organs become weak. Prāṇa plays an important role in the maintenance of the Self.

In the view of Carakasamhitā (CS), vāyu (or Prāṇa) consists of Prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna. Vāyu brings the object perceived by the five sense organs and manas to the ātman. So internal organs like the manas and buddhi, have in common the function vāyu. The internal organs are connected to the five sense organs by this function. And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It is conducive to good health, improvement of strength and complexion, luster, growth, in addition to, attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about cohesiveness for, and movement in the planets sun, moon, stars and planet. And Vāyu is the god of death, controller, and Viśvakarman (creator of the universe).

In the view of Praśastapādabhāṣya (PB), vāyu (or Prāṇa) has two meanings, namely, the internal five winds and the external natural wind.

And the atoms of vāyu (winds) are combined and moved by the god (maheśvara). vāyu the internal winds come into the Self and divide into some parts. These parts are sometimes individually call prāṇa and apāna and so on depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all other parts. prāṇa plays an important role in the maintenance of the Self.

In the view of Abhidharmakośabhāṣya (AK), vāyu is a primary element like pṛthivī, ap, and tejas, and its natural constitution is driving or moving. vāyu doesn't mean the Brahman itself, and it doesn't consist of prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of vāyu (prāṇa) in the Bbh and the view presented in the CS, PB and AK. In the CS, vāyu (or prāṇa) consists of prāṇa, udāna, samāna, apāna, and vyāna. And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It is conducive to good health. Outside the body, it brings about cohesiveness for, and movement in the sun, moon, stars and planets. And vāyu is the god of death, controller, and Viśvakarman (creator of the universe). In the AK, vāyu doesn't mean the Brahman itself, and it doesn't consist of the five winds like prāṇa. In the Bbh, vāyu means the Brahman itself, and it consists of the some winds. In the PB, the atoms of vāyu (winds) are combined and moved by maheśvara.

In these four schools, there is one similarity ;/ the natural constitution of vāyu (or prāṇa) is driving or moving.

Key words : prāṇa, vāyu, five winds

序論

ここでは、チャラカ・サンヒター (Caraka-saṃhitā, 以下CS)^(注1)に見られる風とヴェーダーンタ学派のシャンカラの思想に見られる風或いは生氣とを比較検討する。チャラカ・サンヒターについては、既に一度訳出したが、当時入手していなかったテキスト翻訳を新たに参照し、翻訳に追加した^(注2)。シャンカラについては、既に、仏教思想の俱舍論(以下AK)^(注3)やヴァイシェシカ学派のプラシャスタパーダバーシュヤ(以下PB)^(注4)との比較検討をおこなったブラフマスートラ(以下BS)に対する注釈書ブラフマスートラバーシュヤ(以下Bbh)^(注5)の見解を見ていくこととする。

BbhとAKやPBとの比較考察においては、相違点や共通点として次のようなことがわかっている^(注6)。まず、相違点として、風をブラフマンの変異と認めるかどうか。これは、ブラフマンや最高神を認める学派かどうかで見解が異なっている。また、風や生氣は意とは別の概念を持つ存在とするかどうかや、風を神格化したり、神話的な風を認めるかどうかについては、学派間で相違がみられる。

次に、風が身体に入って、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住している時に、生氣と呼ばれ、これが個人の生氣であり、この生氣が身体から出ていこうとする時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体にとって、生氣は欠かせない存在であるとするかどうかについては、どの学派も基本的に認めている。また、風の基本的な作用を、動きとして捉える点も共通している。

このように、風については、個人の生氣の存在のあり方や、神格化された風の説明等に、仏教や各印度諸学派で微妙な相違があり、その流動性、変化性は特に興味深い。それぞれの学派の特性を見る指標の一つになりうることから、その重要性に鑑み、再びここに論ずるものである。

CSの風説

1.) 個人の生氣

CSでは風はプラナーナ(生氣)等の五風であり、身体を保持し、運動を促進するものである。また、風は感覚機能を活動させ、歓喜と活力の母胎であり、火を煽り、病素を潤渇させ、分泌物を体外へ排泄させ、脈管の通りをよくし、胎児の形成にあずかり、生命の持続の因とされ、医学書観点からの言及が見られる。

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「風は、正常な状態にあるときには、身体の組織を保持するものであり、プラナーナ(prāṇa)、ウダーナ(udāna)、サマーナ(samāna)、ヴィヤーナ(vyāna)、アパーナ(apāna)〔の五種〕よりなり、様々な運動〔作用〕を促進させ、意(manas)を制御し導き、全ての感官(indriya)を活動させ、全ての感官の対象を〔主体の方へ〕運ぶものであり、身体全ての組織(śarīradhātu)を統合するものであり、身体〔各部位の〕結合をもたらすものであり、言葉を発せしむものであり、接触(sparśa)と音の本源であり、聴

覚(śrotra)と触覚の根本であり、歓喜(harṣa)と活力(utsāha)の母胎であり、火を煽るものであり、病素(doṣa)を潤渇させ、分泌物(mala)を体外へ排泄させ、大小の脈管の通りをよくし、胎児(garbhā)の形成にあずかり、生命の持続の因である。」^(注7)

さらに、CSでは風は、それが体内で激化すると、様々な病気で身体を苦しめるとされる。激化した風は健康を破壊し、思考器官を混乱させ、感覚機能を阻害し、生氣(生命)を阻害させる。

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「風は身体内で激化すると、身体を様々な病気で苦しめ、体力、容色、健康、寿命を破壊し、意(manas)を混乱させ、全ての感官(indriya)を阻害し、奇形を生ぜしめたり、流産を誘発したり、恐怖、悲嘆、迷妄、消沈、妄語を生ぜしめ、生氣(プラナーナ)を閉塞させる。」^(注8)

また、CSでは、医者観点からの言及があり、本来、医学を主題とした論書であることが再確認されている。

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「ヴァールヨーヴィダ仙(vāryovida)のこのような言葉を聞いて、マリーチ仙(marīci)が言った—たとえそうであっても、そういうことを語ったり知ったりすることが、医学(bhīṣagvidyā)においてどのような有効性があるのか。〔われわれの〕この議論は、医学を主題として始められたはずだが。」^(注9)

CSの医者観点からの言及はヴァールヨーヴィダが語っている。医者は、風の強さや緊急性を知らなければ、死の恐れから患者を救うために、風をおさえることはできないとし、風を賞賛することは、体力の増進や精力の増強、知力の発揮、寿命を最高度に伸ばすために役立つとされる。

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「ヴァールヨーヴィダ(vāryovida)は言った。もし風がきわめて強力で激しく迅速な(śīghra)作用をし、緊急(ātyayika)対応を要するものであるということを知らなければ、突然激化した風に対応しなければならない医者は、どうして最初に死の恐れから〔患者を〕救うべく、前もってその風をおさえておくことができようか。また風をしかるべく賞賛すること(stuti)もまた、体力(bala)や容色(varṇa)の増進のため精力の増強と蓄積のため、知力の発揮のため、さらには寿命を最高度にのばすために役立つのである。」^(注10)

2.) 宇宙的風

CSでは、身体外での風の状態について言及している。すなわち、風は、大地を支え、太陽・月・星宿・惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていぬものに形状を付与する等の働きがあるとされる。すなわち、

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「正常な状態で〔自然の〕世界において運動している風は、次のような働きをする。すなわち、大地を支え(dharaṇīdhāraṇa)、火の燃焼を盛んにし、太陽(āditya)・月(candra)・星宿(nakṣatra)・惑

星 (graha) の恒常な運行を設定し、雲 (megha) を生じ、雨を降らせ、川の流れを促し、花を咲かせ実を結ばせ、萌え出ずるものを発芽させ、季節を分け、元素 (dhātu) に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させ、種子 (bīja) を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていないものに形状を付与する。」^(注11)

さらに、CSでは、身体外での激化した風について言及している。すなわち、激化した風は、山の頂上を揺り動かせ、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かす等の働きがあり、さらに、雨雲を膨張させ、霧・雷鳴・砂塵・魚・蛙・蛇・灰塵・血・石・電光を生じるとされる。また、季節を破壊し、作物の不作をもたらす、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、世界の終末をもたらす雲と太陽と風を生み出すとされる。

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「実に、この風は激化した状態で〔自然の〕世界において運動すると、次のような作用がある。すなわち、山 (śikhara) の頂上を揺り動かせ、樹木 (anokaha) を根こそぎにし、海洋 (sāgara) を波立たせ、湖水 (saras) を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かせ、雨雲を膨張させ、霧 (nīhāra)・雷鳴・砂塵・魚・蛙 (bheka)・蛇・灰塵・血・石・電光を生じる。また、六つの季節を破壊し、作物の不作をもたらす、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、四つのユガ (caturyuga) の終末をもたらす雲と太陽と風を生み出す。」^(注12)

また、CSでは、宇宙的な神としての風にも言及している。すなわち、風は万能にして不滅の神であり、万物の生滅を引き起こし、幸と不幸を与え、ムリトユ (死) であり、ヤマ (閻魔) であり、ニヤントリ (統制者) であり、プラジャーパティ (生類の主) であり、アディティであり、ヴィシュヴァカルマン (造一切神) であるとされる。また、あらゆる姿をとるものであり、一切のものに遍在し、あらゆる教説を主宰するものであり、存在物の原子であり、全世界をまたにける全能のヴィシュヌ神であり、風こそ神であるとする。

すなわち、CSの言及は以下のごとくである。

「実にそれ (風) は万能にして不滅の神である。〔すなわち〕万物の生滅を引き起こし、楽と苦 (sukhāsukha) を与え、ムリトユ (死) であり、ヤマ (閻魔) であり、ニヤントリ (統制者) であり、プラジャーパティ (生類の主) であり、アディティであり、ヴィシュヴァカルマン (造一切神) であり、あらゆる姿をとるものであり、一切のものに遍在し (sarvaga) 、あらゆる教説 (tantra) を主宰するものであり、存在物の原子 (anu) であり、全世界をまたにける全能のヴィシュヌ神である。風こそ神である。」^(注13)

小結

CSでは個人の生氣、すなわち、身体内の風はプラナーナ (生氣) 等の五風であり、身体を保持し、運動を促進するものである。また、風は感覚機能を活動させ、歓

喜と活力の母胎であり、火を煽り、病素を潤濁させ、分泌物を体外へ排泄させ、脈管の通りをよくし、胎児の形成にあずかり、生命の持続の因とされる。風が体内で激化すると、様々な病気で身体を苦しめるとされる。激化した風は健康を破壊し、思考器官を混乱させ、感覚機能を阻害し、生氣 (生命) を阻害させる。

また、本来、医学を主題とした論書であることを再確認する言及があり、それはヴァールヨーヴィダが語っている。すなわち、医者は、風の強さや緊急性を知らなければ、死の恐れから患者を救うために、風をおさえることはできないとし、風を賞賛することは、体力の増進や精力の増強、知力の発揮、寿命を最高度に伸ばすために役立つとされる。

一方、宇宙的な風、すなわち、身体外の風の状態について言及している。身体外の風は、大地を支え、太陽・月・星宿・惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていないものに形状を付与する等の働きがあるとされる。

さらに、身体外の、宇宙的な風が激化すると、山の頂上を揺り動かせ、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かす等の働きがあり、さらに、雨雲を膨張させ、霧・雷鳴・砂塵・魚・蛙・蛇・灰塵・血・石・電光を生じるとされる。また、季節を破壊し、作物の不作をもたらす、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、世界の終末をもたらす雲と太陽と風を生み出すとされる。

また、神としての風にも言及している。すなわち、風は万能にして不滅の神であり、万物の生滅を引き起こし、幸と不幸を与え、ムリトユ (死) であり、ヤマ (閻魔) であり、ニヤントリ (統制者) であり、プラジャーパティ (生類の主) であり、アディティであり、ヴィシュヴァカルマン (造一切神) であるとされる。また、あらゆる姿をとるものであり、一切のものに遍在し、あらゆる教説を主宰するものであり、存在物の原子であり、全世界をまたにける全能のヴィシュヌ神であり、風こそ神であるとする。

2. Bbhの見解とCSの見解との比較

1.) 個人の生氣

Bbhではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、風はブラフマンから生じ、空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生氣、意、及び一切の器官がブラフマンから生じるとする。CSでは、風自身が万能にして不滅の神であるとしており、神格である。既に比較検討したBPやAKと比較してみると、BPでは、風の原子は、最高神の創造しようという願望により、結合し運動が生じるとされ、^(注14) Bbhと近いが、CSに同じような言及はない。仏教思想であるAKでは、ブラフマン自体を認めないので、最高神の願望もなく、風はその変異ではないので、BbhやBPだけでなくCSの見解とも異なる。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「《同様に一切の生氣 (prāṇa) も〔最高我より生ず、〕一切の世界、一切の神々、一切の存在 (bhūta) 飛

散す。》(ブリハド2.1.20) というこのような類の生気の発生を説く。ここでは、[即ちこの引用文では] 世界等が最高のブラフマン (brahmana) から発生するように、それと同様に生気もまたその通りであるとの意味が述べられている。

同様に、《これより、生気 (prāṇa)、意 (manas)、及び一切の器官 (indriya) 生ず。空、風、火、水、すべての支持者である地が [生ず]》(ムンダカ2.1.3) と、かような箇所などによっても、空等のように、生気にも発生があると認めねばならない。^(注15)

また、Bbhでは、生気に差別はなく、ブラフマンの変異であり、意及び一切の感官の生起は、生気の生起とは別に説かれていることから、生気が意と感官とは別の存在であるとされる。CSでは、ブラフマンの変異という言及はないが、風は正常な状態にあるときには、身体の組織を保持するものであり、プラナーナ等の五風よりなり、様々な運動作用を促進させ、意を制御し導き、全ての感官を活動させ、全ての感覚対象を主体の方へ運ぶものであるとされる。ここでは、風は意を制御するとされ、意とは別のものとして説かれている。PBやAKと比較してみると、PBでは、BbhやCSと少し違い、風自体を原子と結果から二種類に分け、結果を特質とするものという前提ではあるが、身体、器官 (感官)、対象、氣息の四つであるとする。^(注16) AKでは、意は六識とともに七界の一つとされ、BbhやCSと同じく、生気と別に説かれている。^(注17)

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「また、主要の生気も別の生気と同様にブラフマンの変異 (vikāra) であると [前経の説明を] 拡大して示す。またそれについて [次のように] 一切の生気は全く差別なく、ブラフマンの変異であると既に説明された。すなわち、《この [ブラフマン] より、生気、意、及び一切の器官 (indriya) は生ず》(ムンダカ2.1.3) と器官を伴う意とは別に、生気の発生が聖典に [説かれているか] らである。」^(注18)

Bbhでは、風は身体に入って、五つの局面に分かれ、生気 (prāṇa) と呼ばれるとする。同じように、CSでも、風は、正常な状態にあるときには、身体の組織を保持するものであり、プラナーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナ [の五種] よりなるとする。BPやAKと比較してみると、PBでは、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いている。^(注19) この見解は、CSやBbhと類似している。AKには風 (vāyu) が五つの生気に別れるという言説はない。^(注20)

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「まさしく、風がこの自己の中に入って五つの局面 (pañca-vyūha) に別れ、特殊の性質で安住しているときに、生気 (prāṇa) という名で呼ばれる。[風とは] 別の実在でもなく、ただ風だけ (vāyumātra) でもない。」^(注21)

さらに、Bbhでは、個人の生気について、それが出ていこうとした時には、器官は衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立には欠かせない存在とする。CSでは、風が正常な状態にあれば、身体の全ての組織

を統合するものであり、身体各部位の結合をもたらずのものであり、生命の持続の因であるとする。さらに、風が身体内で激化すると、身体を様々な病気で苦しめ、体力、容色、健康、寿命を破壊し、思考器官を混乱させ、全ての感覚機能を阻害し、奇形を生ぜしめたり、流産を誘発したり、恐怖、悲嘆、迷妄、消沈、妄語を生ぜしめ、生気 (prāṇa) を閉塞させる。このように、CSでは、風は身体の存立に大きな影響力を持っており、Bbhの見解と一致するが、その詳細さは医学書であるCSの特徴とも言える。さらに、BPやAKと比較してみると、PBでは、氣息は身体の内にあつて精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因となるとされており、^(注22) その存在が身体と器官の存立には欠かせないとするBbhやCSの見解と矛盾しない。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「また、《汝らのうち、或ものが出て行く時、身体 (śarīra) が最も悪しき状態にあるが如く見えるもの、其のものが汝らのうち最勝なり》(チャンドグヤ5.1.7) と論じて、一つ一つ言語器官等が出て行っても、ただその機能が欠けるだけで、前と同じように生命が持続されることを明示したあと、生気が出ていこうとした時に、言語器官等が衰弱に陥り、且つ身体の崩壊 (śarīrapāta) が付随することを聖典は明示して、身体と器官の存立が生気に基づくことを明示している。」^(注23)

また、Bbhでは、個人の生気の五つの機能について説明があり、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気 (prāṇa)、後方への機能で、入る息等の作業をする吸気 (apāna)、両者の接合において、力を要する作業の原因となる媒気 (vyāna)、上方への機能であり、[死亡時の靈魂の] 出発等の原因である上気 (udāna)、身体は一切の支分に等しく食の精髓を運ぶ等気 (samāna) の五つの機能があるとする。CSは、同じく、五風を説くが、それぞれについてのこのような説明は見られない。BPと比較してみると、PBでも、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いており、五風に通ずる考えからが見られる。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「聖典に《呼気・吸気・媒気・上気・等気》(ブリハド1.5.3) とこのように指名されているから、また主要の生気に、独特の所作がある。そして、この機能の区別は所作の区別に依存している。呼気 (prāṇa) は前方への機能で、出る息等の作業をする。呼気 (apāna) は後方への機能で、入る息等の作業をする。媒気 (vyāna) はこの両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる。上気 (udāna) は上方への機能であり、[死亡時の靈魂の] 出発等の原因である。等気 (samāna) は身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ。」^(注24)

さらに、Bbhでは、生気が呼気等の5つの機能によって、全身に遍満しているのので、微塵であるとされる。CSでは、宇宙的な風は元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させるとあり、むしろ、風は元素の動きの原動力である。PBと比較してみると、PBでは、風の原子に運動が生ずるとあり、Bbhと少し表現は異なるが、微塵であることは同じである。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「また、この主要な生氣は、残りの生氣と同様に、微塵と理解されるべきである。そしてこの場合にもまた、微塵とは、微細と限定とである。それは極微 (paramāṇu) とは等しくない。〔呼吸吸気等の〕五つの機能によって、全身に遍満しているからである。〔主要の〕生氣は微細である。〔死に際して身体から〕出発する時に、傍らにいる人に認識されないからである。また、〔生氣は〕限定されている。出発、進行、帰来が聖典に説かれているからである。」^(注25)

また、Bbhでは、聖典において、生氣と器官が別々に表示されているから、器官と主要の生氣が別ものであるとされている。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「発声器官等は〔主要の〕生氣とは全く別ものである。何故か。表示に区別があるからである。表示に区別があるとは何か。話題になっている諸生氣は、最勝〔の生氣〕を除外して残った十一の器官であると言われる。聖典において、次のように表示が認められるからである。すなわち、《これより、生氣、意、並びに一切の器官生ず》(ムンダカ2.1.3) というこのような類の場所において、生氣と器官とが別々に表示されているからである。」^(注26)

さらに、Bbhでは、主要の生氣と残りの器官との違いについても言及している。器官が熟睡している時、主要な生氣は一人目覚めている。また、主要な生氣は死に襲われない。そして、主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではないとする。CSでも、風が正常な状態であれば、身体の全ての組織を統合するものであり、身体各部位の結合をもたらすものであり、言葉が発せしむものであり、接触と音の本源であり、聴覚と触覚の根本であり、歓喜と活力の母胎であり、火を煽るものであり、病素を涸渇させ、分泌物を体外へ排泄させ、大小の脈管の通りをよくし、胎児の形成にあずかり、生命の持続の因であるとする。また、風が身体内で激化すると、身体を様々な病気で苦しめ、体力、容色、健康、寿命を破壊し、思考器官を混乱させ、全ての感覚機能を阻害するとされ、風は身体の維持と滅亡の理由とするBbhの見解と一致する。BPやAKと比較してみると、PBでは、風を原子と結果から二種類に分け、風の結果を特質とするものが、身体、感官(器官)、対象、氣息の四つであるとする。このうち、感官(器官)は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚であるとされる。(注27) これは、発声器官等の感官が生氣とは別であるとするBbhやCSの見解と少し異なる。PBでは感官は風の結果である。また、AKでは、生氣についての記述もなく、その元となる風(vāyu)が対象を認識することもない。^(注28)

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「また、主要〔の生氣〕と残りには、特徴の違いがある。発声器官等が熟睡している時、ただ主要〔の生氣〕独りが目覚めている。また、そののみが死に襲われない。しかし、残りは襲われる。またそれ(主要の生氣)だけが、そこ(身体)に安住することと、そこから出発することによって、身体の

維持と滅亡の理由となる。また、器官は対象を知覚することの原因であるが、〔主要の〕生氣はそうではない。このような類の多くの特徴の区別が、生氣と器官の間にある。このような理由からしても、これらに別の實在たる関係が成立する。」^(注29)

2.) 宇宙的風

Bbhではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、風がプルシャのために、車輪の穴の如き穴をあけ、プルシャはそこを通り、太陽に到達する。CSでは、風は万能にして不滅の神であり、万物の生滅を引き起こし、幸と不幸を与え、ムリトユ(死)であり、ヤマ(閻魔)であり、ニヤントリ(統制者)であり、プラジャーパティ(生類の主)であり、アディティであり、ヴィシュヴァカルマン(造一切神)であるとされる。また、あらゆる姿をとるものであり、一切のものに遍在し、あらゆる教説を主宰するものであり、存在物の原子であり、全世界をまたにかける全能のヴィシュヌ神であり、風こそ神であるとする。BPやAKと比較してみると、PBでは、風等の原子は最高神の創造により生じることを説くのみであり、BbhやCSに見られる神話的な風はPBにもAKの言説にも見られない。^(注30)

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「《プルシャ(puruṣa)がこの世界を出ていくとき、彼はヴァーユ(vāyu)に到着する。その〔ヴァーユ〕は、彼のために、あたかも車輪の穴(rathacakra)の如き〔穴〕をそこにあける。それによって彼は上昇す。彼は太陽に到着す》(プリバト5.10.1) というのがそれである。」^(注31)

また、Bbhではプルシャは神の世界からヴァーユに入り、さらに太陽に達するとされる。

「《月(六か月・半年)より〔プルシャは〕神の世界(devaloka)に〔達す〕、神の世界より太陽〔の世界〕に》(プリハド6.2.15)と朗誦する。この場合に、太陽が〔ヴァーユに〕続いて到達される〔ことを確実にする〕ために神の世界から〔プルシャが〕ヴァーユに入ると〔理解〕すべきであろう」^(注32)

また、Bbhでは、対論者の説として、生氣が五種にはたらく風であるとしている。さらに、この一切の世界は生氣と名付けられ、金剛杵が振りかざされるように、風が雨雲の状態で回転するとき、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとする。また、聖典が引用され、「ヴァーユにはまさに個物なり、ヴァーユは全体なり、かく知る者は再死に打ち勝つ」という言及が示されている。これに対するヴェーダーンタ派の答えとして、敵論者の説を否定するのではなく、これはまさにブラフマンであると承認されねばならないとする。CSでは、正常な状態で〔自然の〕世界において運動している風は、大地を支え、火の燃焼を盛んにし、太陽・月・星宿・惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、川の流れを促し、花を咲かせ実を結ばせ、萌え出ずるものを発芽させ、季節を分け、元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ乾燥させ、形状の定まっていないものに形状を付与する。また、この風は激化した状態で〔自然の〕世界において運動すると、次の

ような作用がある。すなわち、山の頂上を揺り動かせ、樹木を根こそぎにし、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かせ、雨雲を膨張させ、霧・雷鳴・砂塵・魚・蛙・蛇・灰塵・血・石・電光を生じる。また、六季節を破壊し、作物の不作をもたらす、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、四つのユガの終末をもたらす雲と太陽と風を生み出すとされる。PBやAKと比較してみると、PBでは、対象としての風が、知覚されつつある触の基体であり、触・音声・保持・振動を証相としており、雲などを推したり保持したりするとする。^(注33)これはBbhやCSにも見られるものである。AKでも風の勝れた作用は増大と流動であり、その自相は動きとされているので、何かを動かす力がある点では、BbhやCSと一致している。

すなわち、Bbhの言及は以下のごとくである。

「〔対論者の主張〕広く知られているように、生氣（prāṇa）とは五種にはたらく風（pañcavrttivāyu）である。また、まさに広く知られていることから、金剛杵（vajra）は稲妻であろう。そしてこれは風の偉大がのべられているのである。どうしてか。この一切の世界は、生氣と名付けられ、五つにはたらく風に安住して、動揺する。またまさに風にもとづいて、大いに恐るべき金剛杵が、振りかざされる。何となれば、風が雨雲の状態で回転する時、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るからである。また、風の認識から、まさしくここに不死たること（amṛtatva）がある。即ち、《ヴァーユ（風神）はまさに個物なり。ヴァーユは全体なり。かく知る者は再死に打ち勝つ》（グリハド（3.3.2））と他の聖典に説かれているからである。このようなわけで、ここで、〔すなわち、生氣〕は風であると承認されねばならない。

〔ヴェーダーンタ学派の答破〕以上のように提言されたので、我々は〔次のように〕答える。-ここでは、これはまさにブラフマンと承認されねばならない。』^(注34)

結論

BbhとAKやPBの風についての比較考察から明らかになった共通点や相違点に留意しながら、CSの風について考察にしてきた。それによって、以下のようなことが知られた。

まず、Bbhではウパニシャッド（ムンダカ）を引用し、風はブラフマンから生じ、空、風、火等がブラフマンから生じるように、生氣、意、及び一切の器官もブラフマンから生じるとする。CSでは、風自身が万能にして不滅の神であるとしており、神格である。BPでは、風の原子は、最高神の創造しようという願望により、結合し運動が生じるとされ、Bbhと近いが、CSに同じような言及はない。AKでは、ブラフマン自体を認めないので、最高神の願望もなく、風はその変異ではないので、BbhやBPだけでなくCSの見解とも異なる。

また、Bbhでは、意及び一切の器官の生起は、生氣の生起とは別に説かれているので、生氣が意と感官とは別の存在であるとされる。CSでは、風は正常な状態にあるときには、身体の組織を保持するものであり、プラナーナ等の五風よりなり、様々な運動作用を促進させ、

意を制御し導き、全ての感官を活動させ、全ての感覚対象を主体の方へ運ぶものであるとされる。このように風は意を制御するとされ、意とは別のものである。PBでは、BbhやCSと少し違い、風自体を原子と結果から二種類に分け、結果を特質とするものという前提ではあるが、身体、器官（感官）、対象、氣息の四つであるとする。AKでは、意は六識とともに七界の一つとされ、BbhやCSと同じく、生氣と別に説かれている。

Bbhでは、風は身体に入って、五つの局面に分かれ、生氣（プラナーナ）と呼ばれるとする。同じく、CSでも、正常な状態にある風は、身体の組織を保持するものであり、プラナーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナ〔の五種〕よりなるとする。PBでは、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いている。この見解は、CSやBbhと類似している。AKには風（vāyu）が五つの生氣に分かれるという言説はない。

さらに、Bbhでは、生氣が出ていこうとした時には、器官は衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立には欠かせない存在とする。CSでは、風が正常な状態にあれば、身体の全ての組織を統合するものであり、身体各部位の結合をもたらすものであり、生命の持続の因であるとする。さらに、風が身体内で激化すると、身体を様々な病気で苦しめ、体力、容色、健康、寿命を破壊し、思考器官を混乱させるとする。このように、CSでは、風は身体の存立に大きな影響力を持っており、Bbhの見解と一致するが、その詳細さは医学書であるCSの特徴とも言える。さらに、PBでは、氣息は体内にあって精髓と汚れと要素とを動かすことなどの原因となるとされており、その存在が身体と器官の存立には欠かせないとするBbhやCSの見解と矛盾しない。

また、Bbhでは、個人の生氣の五つの機能について説明があり、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気（プラナーナ）、後方への機能で、入る息等の作業をする吸気（アパーナ）、両者の接合において、力を要する作業の原因となる媒気（ヴィヤーナ）、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気（ウダーナ）、身体は一切の支分に等しく食の精髓を運ぶ等気（サマーナ）の五つの機能があるとする。CSは、五風を説くが、それぞれについてのBbhのような説明は見られない。PBでも、氣息は体内にあり、単一だが、働きの違いによって、呼気等の名前がつけられると説いており、五風に通ずる考え方が見られる。

さらに、Bbhでは、生氣が呼気等の5つの機能によって、全身に遍満しているので、微塵であるとされる。CSでは、宇宙的な風は元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させるとあり、むしろ、風は元素の動きの原動力である。PBでは、風の原子に運動が生ずるとあり、Bbhと少し表現は異なるが、微塵であることは同じである。

また、Bbhでは、主要の生氣と残りの器官との違いについても言及している。器官が熟睡している時、主要な生氣は一人目覚めている。また、主要な生氣は死に襲われない。そして、主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではないとする。CSでも、風が正常

な状態であれば、身体の全ての組織を統合するものであり、身体各部位の結合をもたらすものであり、言葉を発せしむものであり、接触と音の本源であり、聴覚と触覚の根本であり、歓喜と活力の母胎であり、火を煽るものであり、病素を潤渇させ、分泌物を体外へ排泄させ、大小の脈管の通りをよくし、胎児の形成にあずかり、生命の持続の因であるとする。また、風が身体内で激化すると、身体を様々な病気で苦しめ、体力、容色、健康、寿命を破壊し、思考器官を混乱させ、全ての感覚機能を阻害するとされ、風は身体の維持と滅亡の理由とするBbhの見解と一致する。PBでは、風を原子と結果から二種類に分け、風の結果を特質とするものが、身体、感官（器官）、対象、氣息の四つであるとする。このうち、感官（器官）は、触を顕わにし、全身にくまなく存在する皮膚であるとされる。これは、発声器官等の感官が生気とは別であるとするBbhやCSの見解と少し異なる。PBでは感官は風の結果である。また、AKでは、生気についての記述もなく、その元となる風(vāyu)が対象を認識することもない。

Bbhではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、風がプルシャのために、車輪の穴の如き穴をあけ、プルシャはそこを通り、太陽に到達する。CSでは、風は万能にして不滅の神であり、万物の生滅を引き起こし、幸と不幸を与え、ムリトユ（死）であり、ヤマ（閻魔）であり、ニヤントリ（統制者）であり、プラジャーパティ（生類の主）であり、アディティであり、ヴィシュヴァカルマン（造一切神）であるとされる。また、あらゆる姿をとるものであり、一切のものに遍在し、あらゆる教説を主宰するものであり、存在物の原子であり、全世界をまたにかける全能のヴィシュヌ神であり、風こそ神であるとする。PBでは、風等の原子は最高神の創造により生じることを説くのみであり、BbhやCSに見られる神話的な風はPBにもAKの言説にも見られない。

また、Bbhでは、対論者の説として、生気が五種にはたらく風であるとしている。さらに、この一切の世界は生気と名付けられ、金剛杵が振りかざされるように、風が雨雲の状態では回転するとき、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとする。また、聖典が引用され、「ヴァーユにはまさに個物なり、ヴァーユは全体なり、かく知る者は再死に打ち勝つ」という言及が示されている。これに対するヴェーダーンタ派の答えとして、敵論者の説を否定するのではなく、これはまさにブラフマンであると承認されねばならないとする。CSでは、正常な状態で〔自然の〕世界において運動している風は、大地を支え、火の燃焼を盛んにし、太陽・月・星宿・惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、川の流れを促し、花を咲かせ実を結ばせ、萌え出ずるものを発芽させ、季節を分け、元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていないうものに形状を付与する。また、この風は激化した状態で〔自然の〕世界において運動すると、次のような作用がある。すなわち、山の頂上を揺り動かせ、樹木を根こそぎにし、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かせ、雨雲を膨張させ、

霧・雷鳴・砂塵・魚・蛙・蛇・灰塵・血・石・電光を生じる。また、六季節を破壊し、作物の不作をもたらす、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、四つのユガの終末をもたらす雲と太陽と風を生み出すとされる。PBでは、対象としての風が、知覚されつつある触の基体であり、触・音声・保持・振動を証相としており、雲などを推したり保持したりするとする。これはBbhやCSにも見られるものである。AKでも風の勝れた作用は増大と流動であり、その自相は動きとされているので、何かを動かす力がある点では、BbhやCSと一致している。

摘要

風についての見解を比較してみると、CSでは、Bbhのような、風がブラフマンから生じるという言及はないが、そもそも風は神格を持つものである。AKのように、ブラフマンのような神格を認めないわけではない。CSでは、風を正常な場合と、激化した場合に分け、身体内にある場合と、身体外にある場合の働きについて、より詳細に語られており、そこには、CSの医学書としての特徴が見られる。また、風の本性については、AKも風を動きを自相とするものと捉えており、何かを動かす力があるとする点は、CS等の四つの論書に共通している。

注記

- 1.) CS1 Carakasamhitā ed by Ram Karan Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies Vol. XCIV Varanasi 1988
- 2.) CS2 Carakasamhitā ed by Priyavrat Sharma, Jaikrishnadas Ayurveda Series 36, Vol. I Varanasi 2000
原典テキストはCS1と区切り方に若干違いがある程度だが、英訳はより原文に即して翻訳されている。
- 3.) AK Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu edited by Prof. P. PRADHAN K. P. Jayaswell Research Institute Patna 1975
- 4.) PB Praśastapādabhāṣya Sri Garib Dass Oriental Series 13 edited by Vindhyesvari Prasad Divedin Sri Satguru Publications 1984
- 5.) Bbh Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya edited with special references from Ratnaprabhā Nyāyanirṇya etc. by K.L.Joshi Parimal Publications Vol.1.2 Parimal Sanskrit Series No.1. 1996
- 6.) 長友泰潤 「ブラフマーストラのプラーナ説」南九州大学研究年報第47B号 pp.23-27
「ブラフマーストラのプラーナ説」南九州大学研究年報第48B号 pp.1-7
- 7.) CS1 p.237, ll.15-20 CS2 p.82, ll.10-14 矢野道雄『インド医学概論』朝日出版 1988 pp.85-86参照 CS2 p.82, l.12ではsparsāśabdayoḥ, śrotrasparśanayormalam, harśotsāhayor yonih,とあるが、CS1 p.237, l.18ではśrotrasparśanayormalam,

- の前後に (,) はない。
- 8.) CS1 p.237, 1.35~p.238, 1.3 CS2 p.82, 11.14-16 矢野上掲書 p.86参照
- 9.) CS1 p.240, 11.12-13 CS2 p.83, 11.29-30 矢野上掲書 p.86参照
- 10.) CS1 p.240, 11.20-23 CS2 p.83, 11.34-36 矢野上掲書 p.87参照
CS2 p.83, 11.34-35ではcennānuniśamyetsahasā prakupitamatiprayataḥ katham agre ‘ birakṣitumabhidhāsyati prāgevainamatyayabhayāt , vāyor yathārthā stutirapi, とあるが, CS1 p.240, 11.21-22では, cennānuniśamyetのあとに(,)があり, prāgevainamatyayabhayātの後の(,)が(;)となり, stutirapiのあとに(,)がない。
- 11.) CS1 p.238, 11.11-15 CS2 p.82, 11.16-20 矢野上掲書 p.86参照
- 12.) CS1 p.238, 11.28-33 CS2 p.82, 11.20-24 矢野上掲書 p.86参照
CS2 p.82 1.24ではvisargaḥ,とあるが, CS1 p.238, 1.33では, visargaḥ/となり, 区切られている。
- 13.) CS1 p.239, 11. 11-14 CS2 p.82, 11. 24-27 矢野上掲書 p.86参照
CS2 p.82 1.24ではbhāvābhāvakaraḥ,とあるが, CS1 p.238, 1.33では, bhāvābhāvakaraḥのあとに(,)がない。
- 14.) PB p.45 11.19-21 最高神に創造しようとの願望が生ずる…風の原子に運動が生じる。
- 15.) Bbh ad BS 2.4.1 Bbh Vol.2.p.630,11.12-16 金倉円照『シャンカラの哲学』下 p.102 11.4-7参照
- 16.) PB p.44 11.5-7 原子のと結果と…身体・感官(器官)・対象・氣息の四種がある。
- 17.) AK 1.12 AK p.11 11.11-14 七界は意と六識とされている。
- 18.) Bbh ad BS 2.4.8 Bbh Vol.2.p.638,11.1-3 金倉上掲書下 p.118 11.5-8参照
- 19.) PB p.44 11.13-18 単一であるが, 働きの違いによって呼気などと命名される。
- 20.) AK 1.12 AK p.8 11.11-13 風は地, 水, 火とともに四大種の一つである。
- 21.) Bbh ad BS 2.4.9 Bbh Vol.2.p.640,11.12-13 金倉上掲書下 p.122 11.5-8参照
- 22.) PB p.44 11.13-18 生氣は, 身体の内にあつて精髓と汚れと要素とを動かす…
- 23.) Bbh ad BS 2.4.11 Bbh Vol.2.p.641,11.15-18 金倉上掲書下 p.125 11.1-5参照
- 24.) Bbh ad BS 2.4.12 Bbh Vol.2.p.641,1.26~p.642,1.4 金倉上掲書下 p.126 11.3-9参照
- 25.) Bbh ad BS 2.4.13 Bbh Vol.2.p.642,11.12-14 金倉上掲書下 p.127 11.10-14参照
- 26.) Bbh ad BS 2.4.17 Bbh Vol.2.p.647,11.4-7金倉上掲書下 p.133 11.13-17参照
- 27.) PB p.44 11.8-10 風の部分によって… , 全身に遍満する皮膚なる感官である。
- 28.) AK 1.12 AK p.8 11.19-22 風界は動きとされている。
- 29.) Bbh ad BS 2.4.19 Bbh Vol.2.p.648,11.8-11金倉上掲書下 p.135 11.3-8参照
- 30.) AK 1.12 AK p.8 11.18-19 風界の優れた作用である増長とは増大と流動を意味するが, 神話的な風についての言及はない。
- 31.) Bbh ad BS 4.3.2 Bbh Vol.2.p.988, 11.10-11 金倉上掲書下 p.553 11.14-16参照
- 32.) Bbh ad BS 4.3.2 Bbh Vol.2.p.989, 11.4-5 金倉上掲書下 p.554 11.12-15参照
- 33.) PB p.44 11.10-12 対象は, 現に知覚されつつある触の基体であり, 触・音声・保持・振動を証相としており… , 雲などを推したり保持したりする力がある。
- 34.) Bbh ad BS 1.3.39 Bbh Vol.1.p.359, 1.7~p.360 1.3 金倉上掲書上 p.281 11.5-14参照